

台湾921集集地震を引き起こした 活断層の保存とその経緯

Preservation of the Active Fault that Caused the 921 Earthquake
in Chichi, Taiwan and its Process

松多信尚・西川由香

MATSUTA Nobuhisa and NISHIKAWA Yuka

- ①はじめに
- ② 921 集集地震
- ③断層遺跡の概要と保存の現状
- ④断層を保存した経緯
- ⑤考察
- ⑥結論と課題

【論文要旨】

災害遺跡を保存することは防災教育上重要であるが、震災の原因である地震断層を保存することは難しいのが現状である。ところが、1999年に台湾を襲った921集集地震の地震断層である車籠埔断層沿いには、いくつもの地震記念公園があり、地震断層が保存されている。そこで、その保存形態や保存経緯を現地観察や公文書記録から調べることで、なぜ活断層が残されたのかを空間的・時間的に考察した。

その結果、断層の保存は北部ではモニュメントが多く断層線をタイルなどでカバーして保存しているのに対し、中南部では断層に手を加えずそのまま残していることが分かった。この結果は犠牲者の分布と相関があり、犠牲者の多い場所では断層を生々しく残すことが避けられたと考えられ、活断層の保存が必ずしも受け入れやすいものでは無かったと考えられた。

また、記念公園の整備計画に着目するとその目的が時間とともに変化する。そこで、保存の動機を6つの要素（鎮魂・復興記念・記憶伝達・教育・観光・地域の象徴）に分類し検討した。地震当初は教育や記録としての要素のみが強いが、時間の経過とともに復興や観光の要素が強まることが明らかになった。

地震遺跡保存計画には地震を通じて台湾や地域の一体感が高まったとする記述が多数見られることが、台湾の特徴としてある。これは地震がきっかけで台湾人社会（台湾および地域社会）の社会意識や構造が変化したことを意味し、921集集地震（しいてはその原因の地震断層）が台湾史における一大事件の地域シンボルという位置づけを持つことが考えられた。

台湾のケースから言えることは、災害遺跡といった負の遺産の保存には、地域と経過時間に合わせた対応が必要であるだけでなく地域社会のシンボルとして意味づけることが有効だと考えられた。

【キーワード】 921集集地震, 地震遺跡保存, 地震博物館, 車籠埔地震断層, 台湾